主日礼拝５月９日（日）
題　『鳥や草花に囲まれて生きる』
テキスト：ヨハネによる福音書６章：２５～３４節

今日は母の日です。私たちそれぞれに母親との様々な思い出があります。すでにお母さまが召されておられている方々も多いと思います。
わたしもその一人です。星野富弘さん、事故で首から下が動けなくなり、寝たきりでお母さんに介護をしてもらった星野さんが口に絵筆を持って描いたお花の絵に詩を添えられお母のことを思われた詩があります。「ばら・きく・なずな」の花に添えられたことばです。
「淡い花は　母のいろをしている　弱さと悲しみが　混ざり合った　温かな　母の色をしている。」「母の手は　菊の花に似ている　固く握りしめ　それでいてやわらかな　母の手は　菊の花に似ている。」「神様が　たった一度だけ　この腕を動かして下さるとしたら　母の肩をたたかせてもらおう　風に揺れるぺんぺん草の実を見ていたら　そんな日が　本当に来るような気がした。」
皆様の上に、お母さまの上に主の平安をお祈りいたします。
今日の宣教の題には今日与えられた聖書個所から「鳥や草花に囲まれて生きる」とつけました。洲本に来させて頂き、淡路島にはぴったりの言葉だと思います。

今日の聖書個所の小見出しに「思い悩むな」とあります。イエスさまが山上で弟子たちに語られたことばです。「思い悩むな」、人生、あんなこと、こんなことの思い悩んでばかりのような気もします。「悩む」ということばは、心が二つに分かれている状態だと聞いたことがあります。確かに思いが乱れるということがあります。良し悪しは別にして、心が決まっていれば悩み、心を乱すことはないのです。わたしたちは様々なことで考え込み思い悩みます。自分のこと、家族のこと、健康のこと、仕事のこと、人間関係のこと、これから先の生活のことなど、きりがありません。
中でも今日の聖書のイエスさまのことばにあるように、
25:「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。
生きて行く上で、食べものも衣服も大切なのです。後、住む家も大切だと思いますし、最小限の文化も必要ではないでしょうか。
ただし、命は、食べ物、飲み物より大切で、体は衣服よりも大切です。
これは分かる気がします。命、体は、今、生かされ、生きていること。神

さまから与えられたものです。

イエスさまは、周りにいる弟子たち、人たちに分かりやすく、話されます。鳥や花を用いてです。おそらく、語られていたガリラヤの丘の上には鳥が飛んでいたし、まわりには野の花が咲いていたのではないかと想像するのです。ちなみに「野の花」とは、カトリックのフランシスコ会訳聖書では「ゆり」と訳されています。まわりに咲いていたのだと思います。

26:空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

わたしも朝起きて、修祷館の裏庭に行くのですが、空を見たり鳥を見る度に、このことばには「そうだな～」と思わされます。きっと多く人はそうではないでしょうか。

27:あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。「寿命をわずかでも」とは、「身長を一尺でも」との意味にもなるようです。現在は人生１００年時代と言われ、その分、喜び体験も多ければ、思い悩み体験も増えて行くでしょう。しかし、誰であれ肉体の死をいつか迎えることは避けることはできないことは知っています。

しかし、ありがたいことにイエスにある命は、肉体の死で終わるのではなく、永遠に続くのです。それが聖書の信仰です。

28:なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。パレスティナの野辺には赤いアネモネが咲いています。

わたしも散歩して草花を見る時、思い出すことばです。

そして、

29:しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。とあります。ソロモン王はイスラエルの王で紀元前１０００年ごろにいたダビデ王の息子で、後継者の王になった人物で知恵にすぐれていたことで有名で、その優雅さでも秀でていたようです。

しかし、イエスさまは、このソロモンでさえこの花の一つほどにも着飾ってはいなかった。つまり野の花の方が、本質的に優雅さを着飾っていた、神さまからもらった真の美しさを備えているということです。

そして、これから先、主イエスに招かれ共に歩み出そうとしている愛する弟子たちに、

「 32:それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父
は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。
33:何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。神の国と神の義とは、神さまの愛と真実と言われます。そう思います。神さまの愛と真実にすがれば、生きて上で必要なものは、みな加えて与えられる。」と教えられます。何より、神さまを全面的に信頼することを求められます。そのことが信仰者の軸であり、軸がぶれる時、不安と思い煩いが襲って来るからです。信仰の軸をぶらしてはいけないのです。
救い主、助け主、イエス・キリストは来てくださったのです、すでに神の国に居るように生きるのです。
互いに愛し合って、大切にし合って生きるのです。他宗教の方々とも、考え方の違う人とも「互いに愛し合う」「互いに大切にし合う」のです。

信仰を持っていても肉体があるので、生活の中での思い悩みや思い煩い、心の乱れ起こるのです。
しかし、34:だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」
実はここの「苦労」という言葉は「悪」という意味にとれることばでもあるのです。不思議で正直理解が難しいのですが、苦労をほっておくと、悪となる。ただ苦労するだけでは心に悪い考えが起こってくるのだということかと思ったのです。
ですから、その日感じた「苦労」が悪の芽を生み出さないように明日にもちこさないようにしたいのです。明日、思い悩めば良いのです。その日に解決できないことは、神さまにお委ねするのが一番です。それで良いのです。「一日一日を生き抜く。神さまにすがって、より頼んで。」「一日一日を力いっぱい行き抜きなさい。」と訳されている聖書もあります。
神さまを信頼して感謝の心を大切に生きれば、問題はあっても平安の中を生けるのです。主の平安をお祈りいたします。

◆思い悩むな

25:「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

26:空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

27:あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。

28:なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。

29:しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

30:今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。

31:だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。

32:それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。

33:何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。

34:だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」